法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

<書評>駒尺喜美著『芥川竜之介論』について

猪野, 謙二 / INO, Kenji

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
12
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
69
(発行年 / Year)
1965-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019125

暗示を与えている。これらの言は「直ちに天才の心に触れよ」ということにおいて述べられているが、私はそれを「国学の回顧と教育」（大正四年）で述べられている「在るものの説明者ではなく、あらざるべからざるものの憧憬」において中心点としたいと思う。それは著者が、大正十二年の「編集余録」につけた解説にみられる現在での反省「わたしは大正期の青年として、自我の発見にすべてを打ちこみ、それを越えた社会の発見にまだ暗かった」につながるべきものであると思う。まだまだ、副教科書問題や川井訓導事件などに示された毅然たる教育的信念などふれたいことが多いが、不手際に紙数を超過してしまったので筆を擱く。以上忙忽の間に一知半解の妄言を連ねた。著者への非礼をおわびしたい。（信濃教育会出版部刊　A5四六一ページ　七〇〇円）

――二六年三月卒業・京華学園教諭――

×　×　×

駒尺　喜美　著
『芥川竜之介論』について

猪野　謙二

さき頃私は、相前後して三冊の芥川竜之介論の寄贈を受けた。進藤純孝氏の『芥川竜之介』、森本修氏の『芥川竜之介伝記論考』、そして駒尺喜美さんのこの『芥川竜之介論』である。いずれも、多年にわたる努力のあとが感じられる文字通りの力篇でその意味でも深い尊敬を覚えずにはいられないものだった。しかもこの三冊の本はそれぞれ充分に、こんにちにおけるその出現の意味をもっている。ことにそれらがはからずも、最近一般の近代作家研究のさまざまな傾向を代表しているようにみえるのも興味深い。

森本氏の伝記研究は、系図や過去帳、家の見取図や縁談契約書に至るまでのあらゆる資料を博捜して、ほとんどトリヴィアルに過ぎるといいたいほど、綿密に調べあげたものである。そしてとにかく、その考証的研究の一面だけに限っていえば、たしかにかつての吉田精一氏による伝記以上の詳しさということができよう。また進藤氏の大著は、芥川の「神化」もしくは「俗化」を排するため、あくまでも作品それ自体の遂次的な解明を通じて、曲折ある彼の生の条件を追求した力作である。しかしたとえば、あの「芸術的自殺」は「人間性不信の――レアリズムをもつてしては遂にとらへ得ぬ、人間のアフリカの結晶であつた」「それは人間性確信の文学から、人間性不信の文学への道を、身をもつて指してゐた。言ふなれば、芥川の死は、アンチ・ロマンの暁鐘をかき鳴らしてゐたのである」という終章の言葉などがいいあらわすように、ここにはかなり強引に、芥川を現代の文壇批評家たる進藤氏自身の問題意識に引きつけているところがある。その意味では、芥川の文学を「比喩の文学」としてとらえた福田恒存氏の著名な作家論などを、さらに現代的におし進めたものともいえよう。

これに対して駒尺さんの芥川論は、「自分の個展」をもちたくて、というその「あとがき」の謙辞にふさわしく、おそらくははるか

に直接に、著者じしんの生きる生命力の確認や、論理的な欲求をそのモチーフの中にはらんでいる。そして「矛盾の同時存在」であるその暗い現実や人間とそらすことなく取組んで、終生変らぬ「絶対」の探求者――「英雄」の道を生き抜いた芥川の態度を、あくまでも内側からあきらかにしようとしたものである。その精神構造の分析、生のプロセスの追尋は、かなり多くの同意反復を含めて詳細をきわめ、その意味では相当したたかな手ごたえの感じられる作家論になっている。

駒尺さんは、「或阿呆の一生」に記されているあの有名な雨の日の紫色の火花にについても、これを芸術的・人工的な美の象徴とみるのは誤解であるとして、それが実は「メンタル・フラッシュ」のことであり、「精神的欲求」に燃えていたことの象徴であったと力説する。つまり、芸術至上主義者や唯美主義者ではなく、あくまでも「倫理的」な芥川をここにみようとしているのである。

彼女によれば、芥川の価値基準は「絶対」にしかない。真善美のいずれにしろ、すべて絶対、純粋なものにしか価値を認めず、相対の場には下りてこない。彼はそういう理想主義者である。だが、それはもはや武者小路実篤の場合と異って、あくまでも自然主義を通過した理想主義である。そして彼は、両者を止揚する観点をつかみ得ぬまま、そのまま両者に相渉ろうとする。一貫して「絶対」に片眼を据えつつ、他方の眼では「あくまでも欺罔を摘発するために」現実の矛盾をみつめてゆく。そこでたとえば「羅生門」においても、自然主義を越えたこの「美の認識者」の視点に立って、善と悪、正義感とエゴイズムという「矛盾の同時存在たる人間」をみている。また「黄粱夢」については「みてしまった人生とは、彼の価値感によれば生きる価値のないものだ。情熱をかけるべき甲斐はないのだ。しかし理想追求者はそれを納得しない。あくまでも情熱をかけて生きねばならない……」というように記されている。

こうして、この認識者と絶対探求者との並存を生きる芥川のコースが、執拗に跡づけられているのだが、しかもその矛盾の苦悩が彼をニヒリズムに傾斜させることはなく、宗教的世界観にそらしてゆくことなどもない。そしてこのいわば永遠の二律背反を戦い抜くのが「英雄」であり、人間であるとするのが芥川の理想主義にほかならなぬというのだが、なをこの「英雄の論理」は、やがて彼に固有のいわゆる「態度美学」へと連なっている。「原因よりも結果よりも行為の一図さ、情熱そのものが美しい、永遠の美、そこに絶対美をみようとする。」――この「態度美学」はまず「奉教人の死」その他一連の信仰物に展開されるが、あの「蜜柑」の美しさと物足りなさも、実はこの独自な美学にもとづいているとしている。

またたとえばレーニンについても、「芥川の眼にはレーニンの登っている山は必ずしも緑豊かな山ではない。しかもその高い山に向ォて執拗に熱心に登りつづけるレーニンの姿に英雄を見るのである。」「この英雄思想なり態度美学なりは、彼のどんな暗い理性のもとにも生きつづけたのであり、仮構の価値、観念に向って生きることに人生の価値を見ていた」という。この辺になると駒尺さんの理論は、彼女じしんのぬきさしならない内情やその欲求と響きあって、ようやく全体の結論に近づいているのがわかる。

要するに芥川が敗北したのは、いわゆる「社会的不安」とか「作家的不安」とかに屈したのではない。「芥川が敗北したのは、結局のところ彼の健康に敗北したのである。」「確かに彼の中に住む認識者によれば、人生

とは矛盾でしかなく従ってそれが果して価値あるものかどうかは疑問だとされていた。しかし彼はそうした認識のもとに死んだのではなかった。」

「彼が英雄思想に疲れて投げ出したいと思い、侏儒の幸福に安んじたいと思った事も事実であるが、最後まで彼独得の英雄思想を捨てなかった事もこれまた事実であった。」（西方の人」が余すところなくこれを証明しているように。）――というのが、芥川の自殺の原因をめぐって集中的に語られている、きわめてユニークな駒尺さんの結論である。そういえばこの芥川晩年の「健康」の問題について、論者自身が病んだ心臓神経症の経験から、あの「歯車」の地獄的世界には決してデフォルメや誇張はなく、むしろあくまでも「抑制」にもとづく描出になっていることを指摘しているのも注目に値する。

私は行論の過程に見出されるなおいくつかの創見に触れていないが、数多い従来の芥川論の中で、この駒尺論文がどのように新しい意味をもっているかはもはやあきらかであろう。彼女の芥川は、もちろんいわゆる大正期美学の確立者たる「技巧派」その他のチャンピオンではなく、またたんに、転換期の社会や思想による良心的な被害者にとどまるものでもない。さきの進藤氏が、芥川が先駆的につかんだ「人間性不信の文学は、死をもつてしか表現できなかつた」といっているのも、彼女のそれにくらべると、ある意味ではやはり、芥川の「神化」をまぬがれていないという感じがする。彼女の芥川はむしろ平凡だ。だがその反面、認識者としての彼が見出した堅い宿命の壁と向いあって、それから逃れもせず、崩折れもせず、あくまでもその「フィクショナルな中間項を意志的に生きようとする」ほとんど剛毅といってもよいほどの倫理家（モラリスト）である。つまり、芥川という作家を、あくまでも、いわば主体的に生かしてゆく論理の析出というところに、この論の新らしい出現の意味があるといえるだろう。そしてこの芥川を生かす論理とその心理の追求が、実はとりもなおさず論者自身を生かすそれらの発見に裏づけられていたという、この関係の緊密さに、私は一編の作家論にうちこむものの至上のよろこびを想望せずにはいられなかった。それはとりわけ次のような一節を、この本の「あとがき」の中に見出したからである。

「この論文は外側からの位置づけよりも、芥川という人の内面は即して、芥川が生きた芥川の一生を、できるだけ忠実に解こうとしました。これが出来上る項、ほぼ私は死ぬ（少くなくとも廃人になる）予定でしたが、出来上るにつれて私も不思議に生きられるようになりました。多分、あの世も余りかわりばえがしないので、芥川が救ってくれたのでしょう。」

なおここでの駒尺さんが、その「外側」からのせんさくを敢えて一切排除していった理由は私にもよくわかる。だがいうまでもなく、芥川が廻しつづける「二律背反の道」としてのメリーゴーランドが、現実に何によって支えられていたかを無視することはできないだろう。文壇とか私生活とかの物質的基礎の問題を、たんに客体的に明らかにすることを望むものでは決してないが、それら状況との対抗関係という視点が芥川の「内側」そのものをいっそうダイナミックにかつ鮮明に描きあげることになるであろうことはいうをまたない。屈せぬ努力を通じて健康を回復された駒尺さんが、今後はできるだけその関心領域を拡げてゆかれることをも祈りつつ、この忽卒な批評の筆をおくことにする。

――神戸大学教授・文学部講師――